Attac Café　　気候変動リモート連続講座

エコロジー社会主義　気候破局へのラディカルな挑戦＜第２回＞

エコロジー社会主義とは何か

寺本　勉（ATTAC 関西グループ事務局員）

１．自己紹介とテキストの紹介（再掲）

＊1950 年生まれ。元公立高校英語教員。大阪教育合同労組結成（1989）に参加、副委員長・書記長を経験。2002 年頃から ATTAC 関西グループの会員に。

＊アジア社会フォーラム（2003）、世界社会フォーラム（2004〜16）、COP21（2015 パリ）COP23（2017 ボン）の対抗アクションに参加。

＊『市民蜂起　ウォール街占拠前夜のウィスコンシン 2011』、『台頭する中国その強靭性と脆弱性』、『アラブ革命の展望を考える「アラブの春」の後の中東はどこへ』などを共訳

＊『エコロジー社会主義　気候破局へのラディカルな挑戦』（ミシェル・レヴィー）を日本語訳して、柘植書房新社より出版

＊テキストの構成

序章　　二一世紀の大洪水
第一章 エコ社会主義とは何か？
第二章 エコ社会主義と民主的な計画作成
第三章 エコロジーと広告
第四章 エコ社会主義的倫理のために
第五章 マルクス・エンゲルスとエコロジー
第六章 革命とは非常ブレーキである ヴァルター・ベンヤミンの政治・エコロジー思想
第七章 シコ・メンデスとアマゾンを守る闘い
第八章 先住民によるエコ社会主義的闘い
資料１ 国際エコ社会主義者宣言（二〇〇一年）
資料２ ベレン宣言（二〇〇九年）
資料３ リマ・エコ社会主義者宣言（二〇一四年）
訳者あとがき

＊本書について

Michael Löwy Ecosocialism, Haymarket Books, Chicago, 2015 の日本語訳

序章　著者がフランス語改訂版のために書き下ろしたもの

第四章〜第六章　英語版にはなく、日本語版に付け加えた

＊著者のミシェル・レヴィーについて（訳者あとがきから）

一九三八年にブラジルで生まれ、一九六九年からパリに居住している政治哲学者で、パリ国立科学研究所の社会学研究所長などを務めた。さらに、ＡＴＴＡＣや世界社会フォーラムに参加するなど社会運動に積極的にかかわるとともに、気候変動・地球温暖化を生み出す資本主義システムに対するオルタナティブとしてのエコ社会主義について積極的な発信を続けている。

＊各回の内容とテキストの該当する章

第 1 回　エコロジー社会主義の前提〜気候危機とコロナ危機

序章（訳注 9 を含む）、訳者あとがき

第 2 回　本日　エコロジー社会主義とは何か　第 1〜3 章

第 3 回　 2 月 15 日　エコロジー社会主義をめぐる論点〜実現への道程　第 4〜6 章

２．エコロジー社会主義とは何か

＊資本主義生産システムのままでの解決は可能？

・資本主義の本質が、限りない利潤追求と資本蓄積にあるから。世界が滅びるその瞬間まで利潤を追い求めるのが資本主義。

・資本主義のままでも、問題が解決できると信じている（信じたい）人は、気候危機は人間活動一般が原因だと考える。したがって、解決方法を人々の「心がけ」（環境に優しい行動）や技術革新、資本家の「理性的」行動に求める。

・新自由主義的グローバリゼーションに象徴される「悪い」資本主義を「良い」資本主義＝「グリーン資本主義」へと変えることではない。

①　エコロジー社会主義の系譜

＊1970 年代以降に、エコ社会主義という考え方が具体的に登場

マニュエル・サクリスタン（スペイン）、レイモンド・ウィリアムズ（イギリス）、アンドレ・ゴルツ、ジャン・ポール・デリージェ（フランス）、バリー・コモナー（アメリカ）など

＊エコ社会主義ということば〜ライナー・トランペルト、トーマス・エバーマンなど、ドイツ緑の

党左派（1990 年に離党）によって用いられ始めた

＊雑誌『Capitalism, Nature, Socialism』（ジェイムズ・オコンナーなど）の創刊（1988）

＊『国際エコ社会主義者宣言』(2001)、国際エコ社会主義者ネットワーク（ＩＥＡ）の結成 (2007)

＊雑誌『Monthly Review』（1949 創刊、ポール・スウィージー、レオ・ヒューバーマンなど）編集者、ジョン・ベラミー・フォスターなど

② エコロジー社会主義（エコ社会主義）とは何か（１）

＊われわれを含む生物種に適した地球生態系の均衡を保護すること、環境を保護することが資本主義システムの拡張論理や破壊的論理とは相容れない

＊「資本の保護のもとで「成長」を追求することは、短期間のうちに（今後数十年間で)、人類の歴史上かつてなかった破局、すなわち地球温暖化による破局を引き起こすだろう。」

＊エコ社会主義の主張は、マルクス主義による資本批判とオルタナティブな社会に向けたプロジェクトと生産力主義に対するエコロジー的批判を結びつけたもの

＊エコロジー的でない社会主義は袋小路に陥っているし、社会主義的ではないエコロジーでは現在のエコロジー危機に立ち向かうことはできない

③ エコロジー社会主義とは何か（２）

＊生産関係（生産手段の所有形態など）を変えるだけでなく、生産の目的を生産力至上主義から、真に社会的な欲求を充足するものの生産へと変える。

＊具体的には、労働時間を短縮し、不要で危険な生産を規制し、化石燃料を太陽エネルギーなどで置き換える。そのためには、生産システムの集団的・民主的再組織化、無料のサービスと公共部門の根本的な拡大、民主的でエコロジー的な計画作成が必要。

＊それだけではなく、エコ社会主義は、消費のあり方、人間の文化、考え方、生き方をも変えていくプロセスである。

④ エコロジー社会主義の二つの側面

＊エコ社会主義は、未来のためのプロジェクト、根源的なユートピア、可能な将来

・エコロジー危機の根源に手をつける根底的な変革の提案

・生産関係、生産組織、支配的な消費パターンの転換

・西側の現代資本主義文明・工業文明の基盤と決別

・新たな文明のパラダイムを作り出す

＊エコ社会主義は、具体的かつ緊急の目的と提案にかかわる行動でもある

⑤ エコロジー社会主義と民衆の意識

＊「資本主義の「破壊的進歩」から社会主義への移行は歴史的プロセスであり、社会・文化・精神の永続的な革命的転換だからである。そして、まさに定義された意味での政治が、このプロセスで中心にならざるをえないからである。重要なことは、そのようなプロセスは社会・政治構造の革命的転換、および人々の大多数によるエコ社会主義プログラムへの行動的支持なしには始めることができないということを強調することである。社会主義的意識とエコロジー的自覚の発展は

一つのプロセスであり、その中における決定的要因は人々自身の闘いの集団的経験である。そうした発展は、地域的・部分的対立から社会の根本的変化へ進んでいく。」(p. 82〜83)

⑥　エコロジー社会主義に向かう原動力

＊「唯一の希望は、一九九九年のシアトル、二〇〇九年のコペンハーゲン、二〇一〇年のボリビア・コチャバンバ、そして特に二〇一九年九月の気候変動に反対する巨大な若者の運動のような、下からの動員の中にあるのだ。」(p.23)

＊「生態系を破壊する資本によるプロジェクトに対する抵抗運動の中では、多くの国々（とりわけ南北アメリカ諸国）で、先住民コミュニティが決定的な役割を果たしている。先住民の中では、水質汚染と森林破壊の最初の犠牲者である女性がしばしばこの闘いの最前線に立っている。」（p. 24）

３．エコロジー社会主義と民主的計画作成

＊エコロジー社会主義の目標（オコンナー）

①エコロジー的合理性、②民主的コントロール、③社会的平等、④交換価値に対する使用価値の優位にもとづく新しい社会

＊この目標達成に必要なもの（レヴィー）

・生産手段の集団的（公共的・協同的・共同的所有）所有

・民主的な計画作成による投資と生産の目標の明確化

・生産力の新たな技術的体系

＊民主的計画作成の必要性

「(資本主義生産システムの根本的) 転換はエコ社会主義的方法によってのみ、すなわち生態系の均衡保護を考慮した民主的経済計画を通じてのみおこなえる」(p.72）〜生産手段や計画に対する大衆的なコントロール、すなわち投資や技術的変化を大衆的に決定すること

「生産・消費の合理的組織化は、「生産者」の課題であるだけでなく、消費者の課題でもあり、実際には生産者および学生・若者・主婦（主夫）・年金生活者などの「非生産」者を含む社会全体の課題でなければならない。」(p.73~74)

＊労働時間短縮の決定的重要性

「マルクスにとって、技術的進歩の究極の目標は、品物を無制限に貯めこむこと（「所有すること」having）ではなく、労働時間を短縮し、自由時間を増やすこと（「個人の存在」being）なのである。」(p.43)

「労働者が民主的討論と経済・社会の管理に参加するためには、自由時間が大きく増えるこ

とが必要」（p.74）

＊ソ連における「計画経済」は何が問題だったのか？

・テクノ官僚の小さな独裁グループにすべての決定に対する独占権を与えるという、非民主的で、専制的なシステム

・独裁へと導いたのは計画それ自身ではなく、ソビエト国家における民主主義の制限強化であり、レーニンの死後における全体主義的官僚権力の確立

・官僚的計画の限界と矛盾を明らかにした。官僚的計画が非効率的で専制的になることは避けられない

＊民主的計画作成は誤りを犯すか？

「ある消費習慣を放棄する代償を払ってでも、人々が正しいエコロジー的選択をするという保証はあるだろうか？　いったん商品に対する物神崇拝の力が壊れてしまえば、民主的決定をおこなうという合理性が拡がると期待するのは正当なことであり､そこにしか保証はない。大衆的な選択が誤りを犯すことももちろんあるだろうが、専門家なら誤りを犯さないとは誰も信じてはいない。民衆の多数派が、自分たちの闘いを通じて自己教育をおこない、社会的経験を積み、高度な社会主義的・エコロジー的意識を作りあげることによってしか、そのような新しい社会は創造できないだろう。そしてこのことによって、環境的ニーズと一致しない決定を含む深刻な誤りは修正されるだろうと仮定するのは合理的なことである。いずれにせよ、無計画な市場か、あるいは「専門家」によるエコロジー独裁か、そのどちらかを選択することは、たとえ限界があるとしても民主的プロセスよりもずっと危険なことではないだろうか？」（p.79）

＊グローバル・サウスにおけるエコロジー社会主義

・グローバル・サウス～水・食料・衣類・住宅といった社会的ニーズ；医療・教育・交通・文化などの基本的サービスが未充足

・先進工業国より高いレベルの「発展」が必要（鉄道・病院・下水システム・その他のインフラ建設）、火力発電所や原発が必要なのか？

・環境に優しく、再生可能なエネルギーにもとづく生産システムによって実行可能

・グローバル・サウス～飢餓・栄養不足から抜け出すために大量の食料生産が必要、しかしアグリ・ビジネス（工業的農業生産）は、主に輸出用の肉・飼料・穀物、バイオ燃料の原料などを生産し、食料は輸入に依存

・工業的農業（除草剤・化学肥料・遺伝子組み換え作物を集中的に使用）ではなく、小農民有機農業（家族、共同農場、集団農場）により、自給的な食料生産が可能に

４．エコロジー社会主義と「人間の欲求」および広告

＊生産だけでなく消費も根本的変化が必要

・大衆による「過剰消費」が問題なのではない。だから、その解決策は一般的な消費「削減」にあるのではない。
・問題は、陳列、浪費、商品崇拝によって作り出される「偽りの欲求」にもとづく支配的な消費様式である。
・求められているのは、食料品、水、住居、衣類など本当に必要なもの（基礎財）の充足を目的とする生産である。（p. 104〜105）

＊物欲は「人間の本性」なのか？
・「先進資本主義社会における衝動的な大量消費行為は、「人間の本性」の表現ではなく、もっともっと消費しようという人々の生まれつき備わった傾向の表現でもない。」
・「それは資本主義的近代化に特有のものであり、支配的な物神崇拝イデオロギーと切り離せないものであり、広告システムによって盛んに助長される商品崇拝という宗教的カルトとも切り離せないものである。」（p. 112~113）

＊偽りの欲求を作り出すのは「広告」
・資本主義企業は自分たちの生産物の需要を創り出している〜さまざまなマーケティング技術、広告のトリック、計画的な陳腐化によって
・広告は、偽りの「ニーズ」を作り出し、衝動的消費の習慣を形成するように刺激を与える〜大量消費の欲求を産み出すのに重要な役割
・本当の欲求と人為的に作られた欲求とを区別する基準は、もし広告がなくなってしまったとしても、その欲求が存続すると考えられるかどうかという点にある。（p. 105）

＊広告は資本主義に不可欠の要素
・広告は、資本主義の生産・消費システムにおいて不可欠の部分、決定的な歯車である。
・資本主義がなければ、広告には存在理由はなくなるだろう。
・広告は、ポスト資本主義社会の中では、一瞬たりとも存続できないだろう。
・逆に、広告のない資本主義は、歯車の中に砂を投入された機械みたいになるだろう。（p. 107）

＊環境に対する広告の影響
・広告の生み出す衝動的な消費は、地球温暖化と環境破壊を招いている。
・広告は、環境に有害なものを「環境に優しい」と信じ込ませる。
・広告はそれ自身、地球上にある限られた資源の巨大で恐るべき浪費。

＊「ターゲティング広告」〜SNS の膨大な利用者データを利用して居住地や年齢、興味などに応じて広告の配信対象を絞り込む

＊広告との闘いが必要である
・広告のない世界は可能だが、それが到来するのを待つことはできない。
・広告を完全に排除できるまでは、その攻撃を制限しようとするあらゆる試みは環境に対する義務であり、破壊から自然環境を守ろうと願うすべての人々にとっての政治的・道徳的責務でもある。
・広告の暴走を抑制するための闘いが必要。一つ一つの成功は、たとえ限られたものであっても、共同行動を通じてかちとられるならば、正しい方向へのワンステップであり、とり

わけ民衆による自覚や自己組織の獲得における前進である。それこそが、システムを全体として乗り越えていくための最も重要な条件だからである。(p.114〜115)